

5521 **げーぶる** 迎舌中山道ママチャリ旅：落合宿も近い・一休み 083

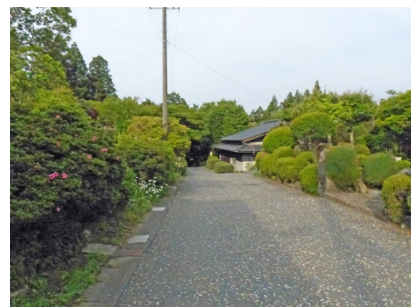
.....

落合の石畳は、落合宿と、次の馬籠宿の間にある。落合宿も近い。

宿場はずれなのか、穏やかな光景。

国内外変わらず、県境や国境は、厳しい立地の場所が多い。

自分が選んだこと。一工夫も、二工夫もして、旅を楽しく、継続したい。人生も。

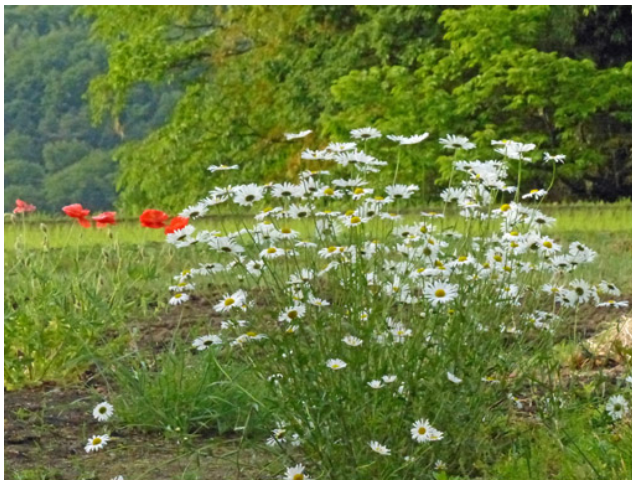


～～山はみどり 野に花 人にはこころ～～

落合宿に行くには、高速道路を横切らなければならない状況。

近いようで、遠回り。下りがあり、上りがある。眺望を楽しみながらの前進。

町外れには、いろいろな歴史の案内板。



落合五郎兼行

平安時代の終り頃、木曾義仲の家来であった落合五郎兼行が美濃口の押さえとして、落合に館を構えていたといわれている。兼行は平家物語巻七寿永二年（一一八三）五月の「火打ち金戦」の項に名を連ねているが、出自は中原兼遠の末子である説や中原氏の一族説等あり、生没不詳で定かでない。木曾義仲に仕えていたことは事実と思われる。

兼行の幼名は駒丸といひ、父源義賢と叔父にあたる義朝との合戦により父義賢が殺されたため、駒丸は幼少のころから乳母の夫である中原兼遠のもとで養育された。

諸記録によると、中原兼遠は樋口兼光、今井兼平、落合五郎兼行と義仲の妻と居る巴の三男一女があり、平家物語の中で義仲の有力な武将として取り上げられている。

館跡とされている所は「オガラン」と呼ばれ、「御藍」（大きな寺院）という言葉からきたと推定され、近くには「小柱洞」という地名も残っている。

実際に兼行が当地の落合に居住していた説に関しては不明な点が多いが、江戸期に書かれた「木曾名所回覧」には「落合五郎兼行の墓内」として、新撰美濃誌には「落合氏宗氏跡は聖の西の路傍にあり、老杉三四株生い茂らうちに兼行の墓あり」と書かれている。

また「美濃国御城越記」には「落合五郎兼行住居の跡地」といふことも、兼行の館跡は後世に文献や地名から推定されたと考案している。

行われた発掘調査からは館跡の痕跡は認められなかった。平成元年に現在ここには、愛宕神社と寛延年間（一七五八）に建立された石灯籠や兼行の頭影碑等があり、毎年八月には例祭が行われている。

平成六年十月吉日

中津川市
おがらんど社
愛宕神社
山之神社
天之神社
落合五郎兼行神社